

脚本「種ジエイミーの超輝かしい人生」

二〇二二年十二月二十日

決定稿

作 種ジエイミー

登場人物

種 ジェイミー	(21)	俳優志望の大学生
雲野 慄	(21)	ジェイミーの友人
虹ノ瀬 かよ	(20)	ジェイミーの彼女
伊奈井 七音	(26)	風俗嬢
種 インディ	(24)	ジェイミーの姉
種 友子	(59)	ジェイミーの母
柊木 詩音	(20)	バイト先の後輩
武内 宗馬	(23)	バイト先の先輩
矢島 純	(21)	俳優志望の同期
林 あかね	(21)	俳優志望の同期
天使 弘大	(22)	自主制作映画の監督
鷹峰 邦正	(41)	福祉センターの担当主治医
金木 秀治	(36)	神学会の信奉者
番場 真司	(36)	芸能事務所 オーディション担当
山下 明虎	(51)	演技の講師
古谷 龍樹	(11)	小学校の学級委員
南原 美希	(11)	古谷の彼女
山花 太一	(16)	高校の同級生
宮澤 和義	(47)	高校の生活指導教員
八代 由美子	(56)	友子の妹
八代 幸光	(24)	由美子の息子

1. 二〇二号室・リビング（夜）

薄暗い電球が粗末な部屋を照らす。

アダルトビデオがテレビから垂れ流されている。

ソファに、くまポン（大きな熊のぬいぐるみ）。

机と向き合う青年の背中。

机上にはオーディション応募用紙。

青年、用紙と手の間にハンカチを挟み、丁寧に文字を書き込んでいる。

自己PR欄に『私は誠実で正直な』と書く。

逡巡の後、ボールペンを塗りつぶして『私は自分が嫌いだ』と書き直す。

ボールペンを置き、溜息をつく。

おじさんの声 「次、高瀬歩さん」

2.

免許センター・待合所（昼）

低身長で猫背な白人系ハーフの種ジェイミー（2

1）が長椅子の上で目を開く。

多くの人で賑わっている。

童顔でキノコ頭の男性が受付に向かう。

受付にて係のおじさんが書類を渡す。

近くの青年達がヒソヒソと喋りだす。

青年1 「歩ってなんだよ、走れよ」

青年2 「すっところそうなやつ」

ジェイミー、不快そうに目をやる。

おじさん 「次、田中裕二さん」

細身の眼鏡をかけた青年が受付に向かう。

青年 1 「おお、ぴったり度、満点」

青年 3 「田中とメガネのコンビは王道すぎるんよ」

ジェイミー、居心地悪そうにソワソワする。

おじさん 「次、谷崎紗枝さん」

日に焼けたポニーテールの女性が受付に向かう。

青年 3 「どう、あれ、ヤレる」

青年 1 「うーん、ギリいけるかな」

青年 2 「でもなんか下手そうじゃね」

青年 1 「あーね、喘ぎ声めっちゃデカそう」

おじさん、次の書類を手に取り、訝しげな表情。

ジェイミー、唾を飲み込む。

おじさん 「次、種ジョイ、種ジェイミーさん」

ジェイミー、立ち上がり、俯いて受付に向かう。

周囲の人達が視線を向け、囁きだす。

青年 2 「今なんて言った」

青年 3 「分かんね、ジョイ」

青年 1 「油汚れに、ジョイ」

笑い合う青年達。

周囲の音が耳鳴りに変わる。

ジェイミー、立ち止まり、目を瞑る。

暗転。

メインタイトル『種ジェイミーの超輝かしい人生』

芸妓や観光客が行き交う。

4. 京都芸術大学・天心館・外観(昼)

学生達が入り出す。

5. 稽古場・内(昼)

ジェイミー、坊主頭に鋭い目の雲野律(21)、
高身長マツチヨの矢島純(21)、短髪で露出の
多い林あかね(21)など学生達が床に座る。

天使弘大(22)、カメラを回す。

教授の山下明虎(51)が一同の前に立つ。

山下 「舞台演技と映像演技っていうのは、似ているようで違うものなんだ。映像に特化した芝居を学べるのがこの大学の良いところだと思うんだけど、やっぱり目標というか、具体的なヴィジョンみたいなのが大切だと思うんだよね。林はなにかある。理想像とか」

林 「そうやな、私は、幅広い演技ができる、メリル・ストリープみたいな女優かなあ」

山下 「ああ、素晴らしい女優さんだね。彼女のように芝居を高く評価されているオスカー俳優たちも、君らと同じように、スタニスラフスキーが考案したメソッド演技を学び、実際に芝居に活かしているんだ」

聞き入る学生達。

山下 「そのメソッド演技を学ぶには、やっぱりイメージをする力が重要になってくると思うんだよね。今日は、そのエクササイズをするから、みんな、ちょっと立ち上がって」

学生達、立ち上がる。

山下 「こうやって手を前に出してみて。そこに種を植えて、どんどん手の上で木が成長していくイメージをしてみよう。そして手がグーっと重たくなってきたら、今度は自分自身が木になっていくんだ」

学生達、腕を伸ばしながら木の形を真似る。

山下
「そして木になったら、そこに木を残して、三步前に歩いて、また別の木を同じように作っていいこう。さあどんどん続けて」

学生達、各々のペースで木の形を真似る。

山下、学生達の間を巡回する。

山下
「自分のペースでいいから、イメージを具現化することを大切に。いいか、自分はもう木なんだって。このイメージ力を養うことで、物だけじゃなく、全く別の人間だって創造することができるようになるんだ。矢島、後ろ振り返ってごらん。そこに何が見える」

矢島
「えっと、木が、さっきの木が見えます」

山下
「だよね、見えるよね、皆どどん木を生やしていいこう」

ジェイミー、後ろを振り返る。

薄汚れた壁。

雲野、隣で失笑する。

6.

同・外(昼)

林
「で、なんの木が見えたん」
矢島、林、ジェイミー、雲野、稽古場から出てきて靴を履く。

矢島
「え、ほら、普通の木や」

林
「ふーん、ジェイミーは」

ジェイミー
「いや、僕は特に」

林
「お互いハズレやなあ」

矢島
「信心が足りんねん、信心が」

林
「なんや、芝居って宗教なん」

矢島
「やかましい。アホな理想像抜かしたくせに」

林 「はあ。理想ぐらい大きく持った方がええやんな」

ジェイミー 「理想か。昔はあったけどね。追い求めてたはずなのに、気づいたら真逆の存在になってたよ」

林 「なんか映画のセリフみたいやな」

矢島 「家に帰ったのに、学校に着いてしもうた、的な」

雲野 「それはただのヤベェやつだろ」

四人、歩きます。

ジェイミー 「大丈夫かな」

矢島 「どないしたん」

ジェイミー 「いや、本当に芝居、上手くなってるのかなって」

矢島 「なっとるやろ、知らんけど」

林 「確かに不安やけど、信じるしかないんやない」

ジェイミー 「まあ、そりゃ、そうだけど」

林 「もうそろ四年なのに就活なんかしとらんし、ここでの勉強なんて社会に出てなになん。今更、引き返せんって」

ジェイミー 「うん。でも、もしこの先き、役者で生きていくのは無理つてなったら、どうすればいいんだらう」

矢島 「かったいなあ」

林 「その時は……」

雲野 「大事件を起こして、歴史に名を残してやろうぜ」

矢島 「まあ、辛気臭い話はやめて、カラオケでも行こうや」

林 「ええなあ、スープトウルーパー、るんるんーん」

ジェイミー 「僕は、いいよ、用事あるし」

林 「またバイト。好きやなあ」

ジェイミー 「お金ないしね。……面倒くさいなあ」

矢島 「あ、いまダイアログからモノログに変わったやろ」

林 「現実まで芝居に置き換えんといてや、芝居バカ」

矢島

「すまん、すまん、メリル・ストリープ様」

林

「あー、またバカにした」

カバンを振り回す林から逃げる矢島。

雲野とジェイミー、二人を置いて歩く。

雲野

「どうせ今夜もしつぱりハメんだろ、アイツら」

ジェイミー

「……」

・

鴨川・遊歩道(夕)

清流の川を漂うアオサギ。

自転車を漕ぐジェイミーと荷台でプラコップのド

リンクを飲む雲野。

雲野

「つまんねえなあ」

ジェイミー

「なにが」

雲野

「なんか、こう、パーっと世界でも終わんねえかな」

ジェイミー

「ああ、よく考えるよ」

雲野

「話してる時にさ、こいつの頬叩いたらどんな反応するんだろうとか、駅でさ、いまから飛び降りても間に合うなあとか」

ジェイミー

「あー、そういうのあるよね。心の中の悪魔、的な」

雲野

「洒落てんなあ。……あ」

キスに熱中するカップルが川沿いに座っている。

雲野、通り過ぎざまに、カップルにドリンクを投げつける。

げつける。

雲野

「俺からのお祝いだ、礼はいいぞ」

ジェイミー

「おいおいおい」

ジェイミー、漕ぐスピードを上げる。

後ろからカップルの彼氏の罵声が飛んでくる。

雲野

「水に流そうぜ、川原なんだからよ」

ジェイミー、思わず吹き出す。

∞

映画館・男子更衣室（夜）

武内宗馬（23）、制服に着替える。

ジェイミー、更衣室に入る。

武内

「ういっす」

ジェイミー

「あ、武内さん、おはようございます」

武内

「どうしたんや」

ジェイミー

「え」

武内

「えらいニヤついとるな」

ジェイミー

「ああ、いや、すいません」

武内

「なんやねん。そーいやあジェイミー君さ、結婚とか考へとるか」

ジェイミー

「え、いや、特に」

武内

「なんか、俺の彼女がな、どうもここ最近、ことあるごとに結婚を匂わせてくんねん。どう思う」

ジェイミー

「どうっていうのは」

武内

「昨晚も、ゼクシイやっけな。雑誌見せてきて、このドレス可愛くない。とか鎌かけてきよつてさ、もうキープに乗り換えたろうかなって」

ジェイミー

「ははは、いやあ、どうなんすかねえ」

武内

「笑わせんなつう話やんな、代わりなんかいくらでもおるし、穴のくせに。口開けとらんで、マンコ開けてろや」

ジェイミー、高笑いする。

武内

「聞かれたらマズいな、ほな、先に行ってるわ」

武内、更衣室から出る。

ジェイミー、真顔に戻る。

9. 同・ロビー（夜）

多くの客で賑わっている。

もぎり台の前に立つジェイミー。

ジェイミー、マイクの電源を入れ、アナウンスをする。

ジェイミー 「本日は当館にお越しいただきまして誠にありがとうございます。館内のお客様にご案内申し上げます」

抜けた茶髪の華奢な柗木詩音（20）が来る。

ジェイミー、マイクの電源を切る。

柗木 「今日は来てないみたいやね、ジュースのお姉さん」

ジェイミー 「なんか用」

柗木 「宣材倉庫の鍵ちょうだい」

ジェイミー 「ああ、はい」

柗木、鍵を受け取って立ち去る。

ジェイミー、マイクの電源を入れ、アナウンスを再開する。

ジェイミー 「引き続きご案内申し上げます。只今より、20時10分上映、スクリーン2番、太陽に祈れ、のご入場を開始いたします。チケットをお持ちのお客様は入場ゲートまでお越しくださいませ」

もぎり台の前に客が並んでいく。

ジェイミー、マイクの電源を切り、チケットを持った客をさばいていく。

父親と、眠る男の子を背負った母親の三人家族がもぎり台の前に来る。

ジェイミー、チケットを受け取る。

ジェイミー 「あの、チケットが二名様分しかございませんが」

父親 「そやけど、なにか」

ジェイミー 「えっと、三名様ですよね」

父親 「子供は寝とるやん」

ジェイミー 「お子様はおいくつでしようか」

母親 「五歳やけど」

ジェイミー 「あの、でしたら入場人数分のチケットが必要にー」

父親 「だから寝とるんやって、日本語分かるか」

ジェイミー 「はい、あの、スクリーン内で寝る場合でも、料金の

方がー」

父親 「ゴームビー、ソンスリップ、アンダースタンド」

ジェイミー 「はい、あの、3歳以上のお客様には料金が発生いたしましたま
してー」

父親 「だから、ゴームビーだって。クレイジー。アーユーク
レイジー」

母親 「子供いるからはよしてや」

ジェイミー、息をゆっくり吐く。

ジェイミー 「ごゆっくりどうぞ」

父親 「最初からそうせえや」

三人家族がもぎりを通過する。

ジェイミー、家族の背を見据える。

10.

同・休憩室（夜）

柗木、長椅子に掛け、牛乳を飲む。

ジェイミー、休憩室に入る。

柗木 「お疲れ、上がり」

ジェイミー 「うん」

売り切れ表示の多い自販機。

柘木

「需要に対して、供給が少ないよね。でもさ、そろそろ補充しに来んじゃね。自販機の可愛いお姉さん」

ジェイミー

「ああ……うん」

ジェイミー、自販機でコーヒーを買う。

柘木

「なに、またダメだったの」

ジェイミー

「あー、いや、まあ」

柘木

「マジ。え、なんで、なにしたの」

ジェイミー

「別に飯に誘っただけだよ。すごい勢いで断られたけど」

柘木

「（笑いを堪え）そっかあ、残念だったね」

ジェイミー

「……それが、案外そうでもなくてさ、そりゃ絶対無理って拒絶された時は死にたかったけど、失恋かって言われると、そういう悲しみはないんだよね」

柘木

「え、じゃあ自販機おねえさんのどこが好きになったの。まさかヤリモク」

ジェイミー

「違うよ。そんなんじゃないよ。でも、まあ、よく分からないんだよね、いや、本当に。みんなが可愛いし良い人だつて言うからかな」

柘木

「みんながつて、自分の意見は」

ジェイミー

「分かんないよ、僕には」

ジェイミー、柘木の隣に座る。

ジェイミー

「数撃ちや当たると言われたのに、百発0中だよ」

柘木

「誰に」

ジェイミー

「武内さんに」

柘木

「……ジェイミーは不器用なんだからさ、一人に絞らないと、バカだね」

ジェイミー

「何を選んでも裏目に出るわ。……でも、なんか、もうどうでもいいや」

柀木 「え」

ジェイミー 「どうせ僕なんかが頑張っても、嫌な気持ちになつてくだけじゃん。なんもおもんねえわ」

柀木 「そう。……じゃあ、お寺行こうや」

ジェイミー 「なんでだよ」

柀木 「なんかきつかけがあるやろ、ウジウジ君には」

ジェイミー 「きつかけ」

柀木、牛乳パックをゴミ箱に投げ入れる。

柀木 「ポジティブになるきつかけ」

ジェイミー 「そんなの無理、無理」

柀木 「はいはい、じゃあ明日の夜ね」

柀木、部屋から出る。

ジェイミー、長椅子に横たわる。

ジェイミー 「温かい」

11. 同・三階(夜)

ジェイミー、窓から外を眺める。

外は小雨が降っている。

雲野、水の入ったバケツを手に、トイレから出てくる。

ジェイミー 「あれ、なにしてんの」

雲野 「なにして、普通にバイト終わり」

雲野、窓から夜道を見下ろす。

ジェイミー 「そうじゃなくて、そのバケツ」

雲野 「ああ、ラインで言つた、あの子供背負つたクソ客さ、さっき下で見かけたんだよ」

ジェイミー 「あのチケツトちよるまかし野郎か。いや、でも顔分かん

ないでしょ」

雲野 「クソ野郎なんぞ、見りや分かるわい」

ジェイミー 「はあ。で、そのバケツは」

雲野 「お、噂をすれば」

雲野、窓際までバケツを持ち上げる。

ジェイミー 「おいおい、なにしてんだよ」

雲野 「いいから邪魔すんなよ」

ジェイミー 「さすがにまずいって」

雲野 「いいんだよ、見とけて」

12. 同・外(夜)

小雨が降っている。

先程の三人家族が出てくる。

上から多量の水が降り注ぐ。

ずぶ濡れになり、慌てふためく家族。

13. 同・三階(夜)

雲野とジェイミー、大笑いする。

雲野 「見たか、あの慌てよう」

ジェイミー 「ひやって言ってたよ、ひやって」

雲野 「ああ、最高。じゃあ、バケツ片してくるわ」

ジェイミー 「うん、また明日」

雲野 「おう、またな」

雲野、トイレに戻る。

ジェイミー、笑いながら階段を降りていく。

14.

歩道（深夜）

本降りの雨。

暗い夜道を街灯が照らす。

ジェイミー、自転車を漕ぐ。

15.

二〇二号室・リビング（深夜）

アダルトビデオがテレビから垂れ流されている。

半裸のジェイミーがバスタオルで髪を拭きながら椅子に座る。

机上に『私は自分が嫌いだ』と書かれたオーディション応募用紙。

ジェイミー、用紙を捨て、パソコンを開く。

ブックマークしたオーディションサイトをクリックし、公募作品の募集キャスト覧を開く。

画面を食い入るように見つめるジェイミー。

役名の右側には『日本人』という記載ばかり。

スクロールしていくと『外国人可』という記載があるも、要項に『身長一七〇センチ以上』と。

ジェイミー、右上の×を押し、検索バーに戻る。

キーボードを繰り返し打つ。

据えた目で画面を見つめるジェイミー。

検索バーに『しね』と何度も打ち込まれていく。

玄関戸が開き、かきあげヘアで三白眼の虹ノ瀬かよ（20）が袋を片手に入ってくる。

虹ノ瀬

「ただいま、ああ、もうビシヤビシヤ」

ジェイミー、パソコンを閉じて、急いでテレビを消す。

ジェイミー 「おお、おお、おかえり」

虹ノ瀬 「なに焦つとーと」

ジェイミー 「え、別に、なにが。あー、風邪ひいちゃうよ」

ジェイミー、自分のバスタオルで虹ノ瀬の髪を丁寧に拭く。

虹ノ瀬 「ありがと。大根なかつたばい」

虹ノ瀬、袋の中のおでんを渡す。

ジェイミー 「ごめんね、わざわざ」

虹ノ瀬 「ううん、あとこれ、入れっぱなしやったよ」

虹ノ瀬、白い封筒を渡す。

右下に手書きで『金木秀治』と記されている。

ジェイミー 「また宗教の人か」

ジェイミー、封筒をゴミ箱に捨てる。

ジェイミー 「寒かったでしょ、お風呂沸いてるけど」

虹ノ瀬 「うーん、おでん食べてから入ろうかな」

ジェイミー 「そう。はい、アーン」

ジェイミー、虹ノ瀬の口にチクワを入れる。

虹ノ瀬、モゴモゴと頬張りながら

虹ノ瀬 「あつ、もうヒルほんた、もう、ほうたばつかひなんに」

ジェイミー 「んー、なに言ってるか分かんない」

虹ノ瀬 「もう、ひかえひ」

虹ノ瀬、ジェイミーの口に半平を突っ込む。

ジェイミー 「あつつ、あつつ」

虹ノ瀬 「あ、ごめんごめん」

虹ノ瀬、冷凍庫から氷を取り出す。

虹ノ瀬 「ごめんね、ほら口開けて」

虹ノ瀬、自分の舌の上に氷を載せ、口移しする。